

やぶなべ会報

自然を見つめる「やぶなべ会」(青森)発行

誌名	やぶなべ会報
号/発行年/頁	16 / 2001 / 28-29
タイトル	横内川遊水池の利用計画
著者名	五十嵐正俊

自然を見つめる やぶなべ会 (青森)

横内川遊水池の利用計画

- 青森版トンボ王国を目指して -
3代 五十嵐 正俊

横内川と合子沢の合流点付近に遊水池を建設中です。

計画された遊水池の建設作業中に縄文時代の川跡が現れたとか丸木船が見つかったとか新聞にも紹介された記事を読まれた方も居られるかと思いますが。その後、丸木船は工事用の重機が埋没していた樹木を引っかけて一部を平らに削っただけと判明したそうです。

しかし、この遊水池を掘削中に3層の埋没林が発見され、最も下層の埋没林は23,300±160炭素年前の針葉樹で49点のサンプル中トウヒ属28点、カラマツ属18点、モミ属1点の構成割合だったという。次の層は13,000炭素年代の233サンプル中トウヒ属110点、カラマツ属79点、モミ属28点、さらにカバノキ属1点が見出されたという。

すなわち、10,000-20,000炭素年前横内付近はトウヒやモミの常緑針葉樹やカラマツ属の針葉樹林に覆われていたようです。そして古い方の針葉樹林は十和田～大不動テラフ(火砕流)の上に成立し、やがて河川の氾濫堆積物で埋没され、その上に成立した同じ様な針葉樹林は十和田～八戸トラフ(火砕流)によって再度埋没されたようです。

その後気候の変動が起り、この付近にはいわゆる縄文の谷が形成され、植生も現代に近いトネリコ属、ハンノキ属、コナラ属、クリ、ブナ属、カエデ属モクレン属などの落葉広葉樹林(約5,000炭素年前)が形成されたようです。

また、発掘された樹種の根株の中には湿地林の主要樹種であるトネリコ属、ハンノキ属の比率が高いことからやや平坦な湿地帯が形成されていたものと推測されます。この縄文の川の両岸からは縄文時代前期の遺跡も発見されています。以上詳しいことは「青森市横内川遊水池埋没林調査報告書」平成11年度青森県教育委員会を参考にして下さい。

昨年(2000年)11月、突然青森県土木事務所から私のところに電話があり、「遊水池に「ビオトープ」を計画しているが、貴方が詳しいらしいので話を聞かせて欲しい」とのこと。

「詳しいわけではないが、関心はありますのでお話を聞きましょう」ということになり、計画の概要を知らされ検討委員を委嘱されております。

最近、「ビオトープ」という言葉をどこかで見たり聞いたりした方も多いと思いますがドイツ語の「Bio」と「Tope」をくっつけた合成語で、生態学事典(築地書館)によれば「特定の生物群集が生存できるような、特定の環境条件を備えた均質なある限られた地域」と定義されているそうです。

日本でも静岡大学の杉山恵一先生がいろいろ本も書かれていますし、学校ビオトープとか屋上ビオトープなどという言葉も流行っているようです。インターネットで情報を探してみますとあちらこちらで盛んに「ビオトープ造り」が行われているようです。どこかの企業でも敷地内に可成りの経費をかけて「ビオトープ」を造りました。といってコンクリートの上に土を盛っ

て木を植え、草を植え、小さなセセラギを造って水を循環させたりしているようです。

その広さもビルの屋上や校庭の隅に造られた数m²規模のものからha単位のものまで様々で、「ビオトープ」という言葉の解釈の仕方もいろいろあるようです。昨年暮れには「学校ビオトープ」についてかなり活発な議論がインターネット上で戦わされておりました。

自然環境に恵まれた田園地帯の学校では休耕田を借り受けて近くの用水を引かせて貰って「小学校ビオトープ」としているところもあれば、都会の小学校では校庭の隅にささやかな緑地を造り、掘った穴にはビニールシートを張って水道水を入れてヒメダカやキンギョを泳がせるといったところもあるようです。また、せっかく造ったのに担当者の転勤で利用されなくなったなどというところもあるようでした。

私どもの少年時代には家の回りが即ち「ビオトープ」で、わざわざ「ビオトープ」とか「自然」を意識せずともその与えられた生態系の中の一員として生まれ育ってきたのです。

ところが、20世紀に入り、人類は自然を力づくで支配できると思ひ込み始めたのではないのでしょうか？気が付いたときには一日中、あるいは何週間、何ヶ月と土に触れることもない生活をする人も居られるようです。

その反省や行き過ぎに気づいたのが「ビオトープ」造りなのでしょう。

平成7年、35年ぶりに故郷に帰って、留守にしていた数十年間の故郷の変貌ぶりには正に「浦島太郎」の様な心境でした。

一昨年辺りからやっと土地勘も戻り、野暮用からも解放されてやっと少年時代から関心のあったトンボ(環境のバロメーター)を探しながらあちらこちらの水辺を歩き回っておりましたが、青森県で記録されている86種(奈良岡広治氏私信)の内、やっと半数ほどの棲息(青森市内に限定)を確認しているに過ぎませんが、どんなルートで私が「ビオトープ」に詳しいなど言うことになったのか判りませんが、発言する機会が与えられたことを報告しておきます。

計画されている横内遊水池は総面積64haのかなり広大なものですが、その内下池地区の33haは青森市の運動公園として野球場(3面)、サッカーグラウンド、ラグビーグラウンド、テニスコートなどが整備され、敷地内には青森県土木事務所、青森県教育センターなどもたてられております。

残りの内、約12haを遊水池の機能が損なわれない範囲で「ビオトープ」として活用したいというのが青森県土木事務所の考えです。

遊水池ですから当然洪水時には下流の洪水予防のため、溢れた水を一時的に越流堤から遊水池内に大量の水が流れ込みます。ただし、平常時は大小様々な池や小川を配置し、環境のバロメーターであるトンボ類を始め、魚類や両生類、蝶などのほか、各種の野生動植物が棲息する空間を創出し、失われた自然環境の復元を視野に入れております。

原則として動植物の放流、移植をせずに近く以前から棲息していた動植物の復元経過を観察・指導・体験出来る場所にしたいと思っております。

青森市内では余り見られなくなった生き物達に直接触れられる楽しい空間造りを目指します。どこまで意見を反映させることができるか判りませんが、多少声を大きく主張していきたいと思っております。

やぶなべの皆様のご支援を期待しております。